書評

Katherine Mezur and Emily Wilcox 編
Corporeal Politics: Dancing East Asia

ケイトリン・コーカー

本書は，transnational（国境を超えた）交流における相互作用や，その差異および共通点を明らかにするものである。舞踊学のみならず，いわゆる「東アジア」の地域研究への貢献が期待される論文集となっている。

『Dancing East Asia（東アジアを踊る）』という副題は，Dancingという言葉が示す通り，踊ることを固定された名詞ではなく，現在進行形の実践で変化していくものと捉えている証左である。踊る中で見えてくる東アジアとして中国・韓国・北朝鮮・日本を指し示してはいるが，そこを発祥地とする，ディアスポラのコミュニティも含めた流動的な意味も帯びているという。そのため，東アジアに固定された地理学的かつ政治学的な地域という意味は含まれていない。むしろ東アジアというコミュニティにおける国家などの観念の影響を認めつつ，ディアスポラのアイデンティティを有するという矛盾のようなものが生じる。また，このDancingも複数の形態があり，いわゆる芸術的なダンスから観光などのためのエンターテインメントまで多岐に渡っている。

そして，表題の『Corporeal Politics（身体的かつ物質的な政治学）』は本論集の学術的な眼差しを示している。それはある場所や文脈，身体から立ち上がる身体運動の政治学である。具体的にいえば，ジェンダーやセクシュアリティー，社会階級，人種，宗教，言語，エスニシティまたは国籍によるアイデンティティ，帝国主義，戦争，移住，革命，テクノロジーなどが挙げられ，様々な視点から言及されている。

東アジア地域研究の批判的な眼差しの延長線上にあるが，その視座は，“decolonization of knowledge production（知識生産の脱植民地化）”という近年盛んに要請されるようになった，地域研究の潮流の目的からできている。既存の多くの地域研究は欧米の学者によって行われていた。とりわけ，欧米のダンスを基準に他者として東アジアを取り上げることがほとんどであった。そこでは欧米の学者およびダンサーの氏名は明記され個別化されるのに対し，東アジアの学者およびダンサーは匿名にされ同質の一枚岩とするような，欧米中心主義の考え方があった。さらにいえば，いわゆる「欧米中心主義」なるものの内部においても，「欧米人」の多様性は省みられず，白人男性中心主義的な傾向がある。この過去の傾向を超克するために近年の地域研究では，東アジアの舞踊を一つの地域，一つの歴史に根付いたものという概念を否定し，東アジアの各地域がローカルおよび国家のナラティヴを持ちつつ，国際的な流れに位置づけようと考察するanti-orientalist（世界を西洋と東洋という二項対立を打破する概念）の姿勢をとっている。この視座は，資本主義国家間の緊張関係とともに，帝国主義および植民地主義が東アジアを形作ってきた勢力とも見なしている。

この知識生産について脱植民地主義・脱白人中心主義の姿勢をとると，現地のダンサーあるいは人々の観点を真剣に受け取ることができ，現地の学者の声も取り入れられるようになる。この姿勢は，本論集の16名の論者の大半が，いわゆる東アジア出身あるいは在住，または東アジアのディアスポラの者であることからも明らかである。本論集の構成は５部からなり，主に20世紀を取り上げて国境を超えた地域的な変動について，年代を追って考察できるよう構成されている。次に，各部および各章を紹介する。

第１部は第１～３章が当てられ，20世記初頭までの中国を中心に据えて論じている。第１章では，歴史家 Beverly Bosslerが，intersectionality（交差性）のあるジェンダーとセクシュアリティー，社会階級に注目して，20世期以前の中国の舞踊の定義および文脈，そしてそれらの変化を取り上げている。Bosslerは，中国あるいは他の東アジア地域での舞踊は，性的な魅力に密接に関係してきたと主張しており，これによって女性あるいは女性らしさのある舞踊家が，社会階級を超えて他者と関係していく逸脱的な人物であることを指摘している。第２章では，文学者Catherine Yehが，伝説的な京劇俳優の梅蘭芳を中心に，京劇と西洋のモダンダンスの歴史的な出会いに焦点を当てている。そこでは，中国の演劇にとってモダンダンスが，いわゆる現代化の原動力になっているものの，中国の文化的なアイデンティティが新たに形成される中では，新しいtranscultural（国境を超えた文化の）身体的な美学の模索にも関わっていたと論じている。第３章では，東アジアの地域研究者Nan Maが，「思凡」という中国の古典的な物語が二人の舞踊家によっていかに表現されたのかを明示している。具体的にいえば，日本人女性と中国人男性という二人の舞踊家についての考察である。Nan Maは舞踊家の社会階級やジェ

ンダーなどの社会的な文脈が，その表現に現れるメッセージにいかに影響をしているのかを明らかにしている。

第２部は第４～７章を一まとまりとし，第二次世界大戦および冷戦下の帝国主義によって促されたtransnational（国境を超えた）交流の時代を取り上げている。第４章では舞踊学者である國吉和子が，日本における前衛芸術の先駆者村山知義を取り上げている。舞踊学の先行研究では，モダンダンスが無批判に帝国劇場によって受け入れられたとされているが，村山知義はそのモダンダンスを無条件に受け入れることもないが拒否することもなかったことを提示している。國吉は，村山知義がドイツで鑑賞したモダンダンスを日記に書き綴っていく中での知的かつ感情的な処理を通して独自の舞踊理論を作っていった点を明らかにしている。この村山の舞踊理論は，西洋・東洋および国家レベルの自・他という二項対立では把握できない，本論集のいうtransnationalおよびtransculturalの過程そのものであろう。第５章では舞踊学者Okju Sonが，1937年にドイツに渡った韓国人舞踊家Park Yeong-inについて論じている。Sonは，日本で西洋風の舞踊を身につけたYeong-inはドイツで東アジアを代表する舞踊家として扱われたと述べている。第６章では中国学者Emily Wilcoxが，トリニダード生まれの中国ディアスポラ舞踊家Dai Ailianの作品群を取り上げて，中国文化の身体化として考察している。第７章では演劇学者Ji Hyon (Kayla) Yuhが，『パレル　洗濯』という2005年の韓国オリジナルミュージカルを分析している。特に，本ミュージカルでの，当時の韓国におけるモンゴル人そしてフィリピン人の男性移民労働者の困難と野望の描き方について論じている。

第３部は第二次世界大戦中の日本側のプロパガンダおよびその国際的な影響に注目した部分で，第８～10章にまとめられている。第８章では舞踊学者である岡田万理子が，1930年代後半の京都「都をどり」が担った日本の帝国主義的なプロパガンダを拡散する役割を明らかにしている。第９章ではパフォーマンス学者Tara Rodmanが，日本軍が占領下のフィリピンで企画していたページェントについて分析し，1944年の企画が日本帝国主義を太平洋地域に拡大させるためのパフォーマンスであったとしている。第10章では舞踊学者Ya-ping Chenが，日本による植民地化（1895-1945）そしてKMT政府の戒厳令（1949-1987）を経た台湾人たちの身体が，いかに脱軍国主義化できるのかという問いに対し，台湾のコンテンポラリーダンサー Lin Lee-chenによる1995年の作品『Jiao（Mirrors of Life）』をもとに読み解いている。

第４部には第11～13章があてられ，中華人民共和国および北朝鮮での社会主義の文化および芸術を取り上げ，既存研究における欠如を補う部分となっている。第11章では歴史家Suzy Kimが，北朝鮮舞踊が担うプロパガンダの役割を重視した先行研究に対し，舞踊家崔承喜を取り上げて舞踊の理論的かつ芸術的な深さを考察している。第12章では舞踊学者Dong Jiangが，中国の古典的な舞踊が中国社会とともに変化してきた経緯を論じている。第12章では舞踊学者Ting-ting Changが，中国の少数民族出身の舞踊家Yang Lipingの作品に注目して，Lipingの中国内外への影響を明示している。

第５部は第14～16章で，舞踊家が戦後の社会変動に応えていった様相を考察する部分である。第14章ではパフォーマンス学者Katherine Mezurが，暗黒舞踏の先行研究における男性中心主義的な傾向を批判した上で，女性舞踏家の芦川羊子と古川あんずを舞踏史において非常に重要な人物として取り上げている。Mezurは「良妻賢母」などの日本におけるジェンダー概念について女性を抑圧するという文脈上にあるとしながら，舞踏における動きは一人の男性振付家から生まれるものではなく，女性舞踏家の体においてはじめて実現できるとし，彼女らの存在の大きさを指摘している。この論述はNew York Butoh Instituteが2021年10～12月に開催した『舞踏を定義する女性』と同様の意図をうかがわせる。第15章ではパフォーマンス学者Soo Ryon Yoonが，20世紀初頭の韓国のキリスト教と国家主義について，パフォーマンスを通して繋がっていった状況を示している。第16章では舞踊学者Yatin Linが，台湾を拠点とする振付家Huang Yiの作品に着眼し，人間とデジタルテクノロジーとの関係の表現方法を検討している。

評者は，本論集について次の課題に言及しておきたい。まずは，このような地域研究は，ある「地域」を研究対象としながらも，「地域」という固定概念に囚われない視座をとることに，ハードルの高さがある。そして，知識生産の脱植民地主義・脱白人中心主義の姿勢をとりながらも，本論集が主要言語を英語とする研究会を中心にしている限り，英語圏外の学者との深い交流が促されるのか，という懸念がある。英語という言語そのものに，英語圏の歴史的な文脈，そしてその白人中心主義および帝国主義がついてくるのではないかという，興味深い問いが生じるのである。

（University of Michigan Press，2020年９月刊行）